

【研究ノート】

カナダ多文化主義の源流としての大戦間期： 文化多元主義の登場とその特徴

田中俊弘

はじめに

カナダは世界に先駆けて多文化主義を1971年に国是と定めたこともあり、そうした主義・政策への逆風が世界的に強まる現在でも、その重要性を強調し続けている⁽¹⁾。2022年の「多文化主義の日」(6月27日)には、ジャスティン・トルドー(Justin Trudeau)連邦首相が、「多文化主義がカナダ人としての私たちを作り出し、多くの文化的コミュニティが私たちの国に貢献してきた長い歴史がある」点を強調し、「世界中の人々を、両手を広げて迎え入れるカナダの誇り高い長年の伝統が、今日のカナダを形成し続けている」と述べた⁽²⁾。また、2022年にカナダ統計局が15歳以上の国民を対象に実施した調査によれば、実に92%が「民族的・文化的多様性」をカナダ的価値の1つとみなしていることが明らかになった⁽³⁾。

カナダもいわゆる「文化戦争(Culture Wars)」とは無縁ではない。2021年から2022年にかけてIPSOS社が28ヶ国で23,000人以上からの回答を得た調査によれば、自国がそのような文化間の争いで分断されていると回答したカナダ人は、世界平均の35%やアメリカ合衆国の57%を下回ったとはいえ28%にのぼり、民族間の緊張関係があると回答したのは世界平均62%を超える64%であった⁽⁴⁾。先住民との「和解」に苦しみ、また、コロナ禍下ではアメリカ合衆国同様にアジア系への差別行動も見られたカナダを多文化共存のユートピア社会として描くことは出来ない。しかしそれでも、多くの移民や難民を毎年受け入れて、南の隣国よりもマイノリティに優しいとされる社会が展開しているカナダの多文化主義を過小評価するのも誤りである。そのテーマの重要性ゆえに、多くのカナダ研究者の関心が多文化主義に向かっており、法学、政治学、哲学・思想、社会学などを含む多角的な視点からの検証と議論が蓄積されている。

本稿は、このように現代社会において重要な概念の1つとされ、その中でも特にカナダの果たす役割や立場が注目されている多文化主義のルーツを第二次世界大戦以前の文化多元主義に求めて、その時代の特徴や社会全体の意識変

化を理解しようとする試みの端緒である。2021年に刊行されたダニエル・R・マイスター(Daniel R. Meister)の『人種的モザイク:カナダ多文化主義の前史』⁽⁵⁾に触発されて、カナダに文化相対主義の意識が芽生え始めた当時の社会の状況を、モザイク社会という語をカナダに定着させたジョン・マレー・ギボン(John Murray Gibbon)らの立ち位置や議論も参照しながら概観し、当時の文化多元主義の特徴やその限界、現在の多文化主義との関係を整理して論じていく。そして、大战間期カナダの多民族社会の有り様に関する研究を今後進めていく足掛かりとしたい。

1. カナダ多文化主義のルーツとしての文化多元主義

そもそもカナダの多文化主義の歴史を論じる際には、1960年代後半の移民政策の転換を出発点とする場合が多く、その源流を第二次世界大戦以前に求める試みは、上にあげたマイスターの著作などを除けば、カナダでもほとんど行われてこなかった。マイスターも説明している通り、大战間期には、平原諸州(ロッキー山脈以东のアルバータ州、サスカチュワン州、マニトバ州)に大量に流入してきたドイツ系、オーストリア系、ロシア系、ポーランド系、そしてスカンジナビア系などの白人移民について、「その諸文化を祝福することではなく彼らを『カナダ化』することに焦点が当てられていた」からである⁽⁶⁾。

また、多文化主義の概念には、それぞれの民族文化の尊重という側面だけではなく、諸民族の多様性に配慮しながら国家に統合する施策・政策という意味合いが込められており、大战間期の政府にそのような姿勢がほとんど見出せなかった点も指摘しておく必要があるだろう。歴史家N・F・ドレイジッガー(N.F. Dreisziger)によれば、イギリス系とフランス系以外の民族集団への配慮や彼らの主流社会への包摂を意図した政策が採られるのは、第二次世界大戦中の戦時軍務省(Department of National War Services)にナショナルリティ部門(Nationalities Branch)やカナダ市民権取得への協力に関する諮問委員会(Advisory Committee on

Co-operation in Canadian Citizenship) が設置されたのが嚆矢であり⁽⁷⁾、第二次世界大戦前には多文化主義的な政策が立案される余地さえ存在しなかった。なお、これらの戦時軍務省内の組織にしても、円滑な戦争遂行と国民の動員が主たる目的であったため、各民族文化の平等性を容認する現代的な意味での多文化主義には程遠かった。さらに言えば、第二次世界大戦中に至るまで「非白人」の扱いは特に厳しく、たとえば日系カナダ人が第一次世界大戦前から太平洋戦争中にかけて経験した激しい差別に顕著なように、大戦間期のカナダは現代の多文化主義の理想からはかけ離れており、そこは差別が恒常的に存在した世界であった。

しかし、カナダの少なくともヨーロッパ系諸民族の民族性を重視するという意味では、現代の多文化主義が大切にしている考え方が第二次世界大戦前の人々の間に徐々に芽生えていたのも事実である。CBC ラジオのシリーズ番組の内容に基づくギボンの著書『カナダのモザイク：ある北方国家の形成』（1938年）⁽⁸⁾ が定着させたモザイクという語は、現在でもカナダの多文化共生社会を表す際にしばしば用いられているが、この語に象徴される文化多元主義は、現代カナダの多文化主義の直接的なルーツとみなすことができよう。大戦間期は、アングロサクソンの価値観（ブリティッシュネス）への追従と同化を当然視するアングロコンフォームィティから国民の民族文化の多様性を容認するモザイクへの意識変化が始まった時代であり、その意味で現代の多文化主義と通じている。それは、アメリカ合衆国で登場したメルティングポット（るつぼ）論とその批判の議論の潮流に追随した変化であった。

2. アングロコンフォームィティ論からの離脱： メルティングポット論、そして文化多元主義へ

20世紀初頭から大戦間期にかけてのアメリカ合衆国とカナダでは、ヨーロッパとは異なる多民族社会の新たな形態が模索されていた。それがメルティングポットとモザイクという2つのメタファーに象徴されている。昨今では両者の類似性が強調されることもあるが⁽⁹⁾、少なくとも20世紀前半においては、全ての民族を融合して1つの国民を作ろうとするメルティングポットと、多様な民族文化の平和的共存を目指すモザイクは明確な違いを持つ対抗概念であり、前者はアメリカ合衆国社会のそして後者はカナダの多民族社会の象徴とされてきた。

メルティングポット論は、イズリアル・ザングウィル (Israel Zangwill) が1908年の戯曲でアメリカ合衆国を「ヨーロッパの全ての民族が溶けて再形成されるメルティングポット」とみなして、ドイツ人、フランス人、アイルランド人、イングランド人、ユダヤ人、そしてロシア人などをるつぼに入れて、「神はアメリカ人を作っているのだ」と記したことで⁽¹⁰⁾、アングロコンフォームィティに代わる新たなシンボルとなった。カナダの政治学者ガース・スティヴンソン (Garth Stevenson) は、それを「アメリカ的な楽観主義の産物」とみなし、メルティングポット論は、「人間の性質が十分に柔軟であり、少なくともヨーロッパ人で

あれば誰でも、ヨーロッパのやり方を捨ててアメリカの理想を採用すればアメリカ人になることができるし、その理想は普遍的に適用できるという信念に基づいていた」と説明している⁽¹¹⁾。民族間の対立を繰り返すヨーロッパ世界を離れて新大陸にやってくれば、そこで民族間の壁をなくして1つの「アメリカ民族」を生み出せるという理想が、メルティングポット論の原型をなしていた。

このメルティングポットというメタファーは、アメリカ合衆国では大戦間期から第二次世界大戦後も使用され続け、それが（カナダと同じ）サラダボールやモザイクといったメタファーに置き換わるのは1970年代以降のことである⁽¹²⁾。しかし、早くも第一次世界大戦期には哲学者ホレス・カレン (Horace Kallen) や作家ランドルフ・ボーン (Randolph Bourne) らからの批判を浴びている。各民族の自民族文化への帰属意識とアメリカ合衆国に対して抱く誇りは両立するし、移民の出身国への忠誠心はアメリカ合衆国をまとめていく際の障害にはならないとする文化多元主義は⁽¹³⁾、その後、大戦間期のカナダにも受け入れられて使用されるようになる。

カレンらが1915年以降の著作でメルティングポット論を批判したのは、それが後発移民や民族的マイノリティをホスト社会に同化させる装置に見えたためであり、結局アングロコンフォームィティとの間に明確な差異が見出せなかったせいである。また、彼らは実際のヨーロッパ系アメリカ人の暮らしがメルティングポットにはほど遠いとも認識していた。そしてカレンは、「移民グループの中で最もアメリカ志向の強いグループは、精神と文化において最も自律的で自意識過剰なグループでもある」点を強調し、その民族性を維持する重要性を主張した⁽¹⁴⁾。ヨーロッパのやり方を捨てずにアメリカ社会に貢献できるのであれば、自分たちのルーツの民族文化をアメリカ文化に溶かし込んで消失させる必要などないし、現実的にそのような同化は不可能であった。

社会学者の村井忠政が指摘するように、メルティングポット論は厳密な社会学的概念と呼べるものではないし、「溶ける」という言葉自体も非常に曖昧で、「アメリカに移民として渡ってきた人種・民族集団が、相互に婚姻を繰り返す（すなわち交婚する）ことによって『生物学的に』溶け合う（すなわち混血する）のか、それとも多様な異なった文化が相互に融合することで『新しい文化』に変容するのか」など⁽¹⁵⁾、多様な解釈が可能となっていた。それゆえこの語は、アメリカ人の結束の象徴として第二次世界大戦後も使い続けられた一方で、アングロコンフォームィティ同様にマイノリティのホスト社会への同化を迫る立場として批判にも晒された。

しかし実を言えば、カレンらにとっての直接的な論敵はメルティングポット論者ではなく、社会進化論や優生学を信奉し、アングロサクソンの優位を説き、移民の排斥を求めた人々であった。実際に1915年のカレンの論考は、社会学者で優生学者のエドワード・アルズワース・ロス (Edward Alsworth Ross) に対峙する形で執筆されている。そのロスは前年の著作で、「私は、ここ（アメリカ合衆国）

が将来、他の人類に計り知れない価値をもたらす可能性のある国だと考える。ただしそれは、ここでの生活のしやすさが、高い生活水準・制度・理想によって恒久化されるのが条件であり、そうすれば最終的にすべての人がそれを享受できるようになるだろう」と述べ⁽¹⁶⁾、アメリカ社会の水準を引き下げかねない移民を安易に受け入れるべきではないとの立場をとった。そしてこの国が後発地域の犠牲になることも、国内での「劣等移民」を自分たちと同化することも、彼らの文化を尊重することも拒んだ⁽¹⁷⁾。このようなロスの議論が特殊だったわけではない。第一次世界大戦前から大戦間期にかけてのメルティングポット論や文化多元主義は、社会進化論や優生学に基づく排他主義や人種差別が一般的な時代に登場したのである。

1920年代から1930年代にかけてのカナダは、以上のようなアメリカ合衆国での議論の影響を受けて、また、ギボンの『カナダのモザイク』などに触発されて、自らを文化多元主義に基づくモザイク国家と自認するようになっていく。

3. 大戦間期カナダにおける文化多元論登場とその背景

カナダではメルティングポット論があまり浸透せず、アングロコンフォーミティ論から直接的に文化多元主義へと移行した理由を実証的に議論するのは難しいが、1つにはフランス系の存在が大きかったに違いない。メルティングポット論者たちが目指した「ハイフンの付かない (unhyphenated)」、すなわち、何系かという民族出自に拘泥しないアメリカ国民の創出は、イギリス系とフランス系に長らく分断されてきたカナダ社会の目標とはなり得なかった⁽¹⁸⁾。あるいは前出のスティヴンソンが指摘したように、人口がまだまだ少なく、アメリカ合衆国のように孤立主義や移民制限に向かう余裕がなかったカナダでは⁽¹⁹⁾、メルティングポット論は非現実的だったのかも知れない。結果としてカナダの文化多元主義は、メルティングポット論に対してというよりは当時の社会で一般的だった白人の序列化や社会進化論、優生学などと対峙することとなった⁽²⁰⁾。

文化多元主義が大戦間期のカナダに広まり始めたのは、イギリス・フランス以外からのヨーロッパ系住民の存在感が増した状況への当然の反応とも考えられる。1931年の国勢調査結果によれば、カナダ総人口1,037万6,786人の17.5% (182万5,252人) が非英仏系ヨーロッパ人であり、平原3州に限ればその総人口193万1,679人の40.0% (77万2,572人) にまで増加した⁽²¹⁾。もはや彼らの存在を無視出来なくなっていたのである。

ギボンによれば、カナダ社会についてこの語を初めて使用したのは、アメリカ合衆国のジャーナリストのヴィクトリア・ハイワード (Victoria Hayward) であった。彼女は1922年の著作『ロマンティック・カナダ』で「古いヨーロッパの多くの国々と広範な地域を代表する新カナダ人は、平原諸州に教会建築の多様性という形で貢献してきた。...それはまさに、平原地域で試みられている広大な面積と幅を

持つモザイク画である」と記している⁽²²⁾。このモザイクという語が最初にカナダの平原地域の描写に用いられた点は重要である。カナダ平原諸州には東部カナダとは全く違った形で社会が展開しており、ドイツ系、ウクライナ系、あるいはスカンジナビア系などの割合が大きく、多民族性が顕著であった。

そしてそこはアメリカ合衆国西部の状況とも異なっていた。歴史研究者フランセス・スヴァイリーバ (Frances Swyripa) は次のように説明している。

伝統的にアメリカ人は西部のことを、東部からの止むことのない移民によって開拓された着実に進歩するフロンティアであり、移民はその空間を埋めるだけの存在だと考えてきた。他方、カナダの平原地域は、鉄道によって急速に開拓され、移民 (特に非英国系移民) が主要な担い手とみなされた。この「外国的 (foreign)」な「移民 (immigrant)」のフロンティアは、新参者を同化することで自分たちの財産を確保しようと決意していたカナダ国内移住者を疎外し警戒させたが、同時に新参者を自動的に参加させ、彼らに場所や所属の感覚を促した。...1893年にフレデリック・ジャクソン・ターナー (Frederick Jackson Turner) は、アメリカのフロンティアが平等、民主主義、個人主義を奨励し、平準化の影響を与えるものだと主張した。...カナダの現実はずっと複雑であることを示唆している。民族・宗教の違いは消去されたり最小化されたりするのではなく、より顕著になり、民族・宗教の多様性は物理的な景観や西部の特徴の一部として正当化されるようになった⁽²³⁾。

こうして19世紀末から短期間で定住が進み、マイノリティの民族的・宗教的なアイデンティティが隣国以上に色濃く維持された西部平原地域が、カナダの文化多元主義の創造の源となっていくのである。

マイスターは大戦間期カナダの文化多元主義を代表する人物としてワトソン・カーコネル (Watson Kirkconnell)、ロバート・イングランド (Robert England)、そしてギボンをあげている。その3人に共通するのは、カナダ平原州などでの体験を経た点であり、それが彼らの文化多元主義に影響したと考えられる。文学者であり詩人でもあったカーコネルは、ヨーロッパ系エスニックマイノリティの詩の翻訳で知られ、彼ら「ニュー・カナディアン」の擁護者として知られているが、元は優生学を信じ、アングロサクソンの優越を疑わない人物であった。それが1922年にマニトバ州ウィニペグのウェズリーカレッジ英文学科で教壇に立つことになり、そこでの「異文化体験」が彼の世界観を変えていった⁽²⁴⁾。

2人目のイングランドは1920年代から1930年代にかけてカナダ・ナショナル鉄道でヨーロッパ移民の誘致に関わった人物である。もともと同化政策は必須で、中でも特に東欧移民は危険で同化が必要だと主張していた彼が立場を変えていったのは、サスカチュワン州での生活体験が影

響していたに違いない⁽²⁵⁾。カナダ太平洋鉄道の広報官で、『カナダのモザイク』の執筆以外にもカナダの文化・芸術、そして観光の振興にも尽力したギボンには、平原諸州に暮らした経験こそないが、カナダ西部を愛し、1909年以降定期的にカナディアンロッキーでの乗馬や観光を楽しんでいた⁽²⁶⁾。また、他の西部諸州を訪れる機会も多かった。彼も、反ユダヤ主義的な立場を示した時もあったが⁽²⁷⁾、少なくとも全般的に「白人」についてはその多様な民族文化を尊重し、その促進に努めた。

先にも述べたが、決してそのような働きかけが当然だった時代ではない。1920年代と言えば、カナダでも移民排斥や人種差別の運動がむしろ興隆していた時である。たとえば1925年にはトロントにクー・クラックス・クランのカナダ支部が設立されて、そこが反ユダヤ主義や反移民運動の拠点となった⁽²⁸⁾。そのような中、カナダ西部平原諸州での経験などによって立場を変えた文化多元主義者たちが、イギリス系・フランス系以外の民族文化を賞揚して、新しい価値観を徐々にカナダ国民の間に浸透させていったのである。

4. カナダ多文化主義の前史としての文化多元主義

大戦間期を多文化主義の前史とみなす上で、そこにさまざまな限界や制約があったのは明らかである。まず、文化多元主義を唱えて運動していた人々が数的に限られていた点に留意しなければならない。マイスターは、「1920年代半ばから1930年代半ばにかけて、文化多元主義を発展させ、それを促進しようと活動的に関わってきたのはほんの一握りの個人であった」と説明している⁽²⁹⁾。まだまだ民族差別意識や社会進化論の影響が大きい世の中であって、政府ではなく一部の知識人が、その文化相対主義的な世界観を示すようになった段階に過ぎなかった。

彼ら文化多元主義者の関心がかつぱらイギリス系とフランス系以外のヨーロッパ系新移民である「ニュー・カナディアン」にばかり向いていて、先住民を含む「非白人」に対する差別から脱却できていなかった点も、彼らが抱えていた限界の1つであった。マイスターは、カーコネルの中で文化多元主義と人種差別主義が共存していたとし、イングランドについても「白人」と「非白人」の区分を当然視していたと指摘している⁽³⁰⁾。そしてそのような傾向は多かれ少なかれギボンにも見られたようである⁽³¹⁾。彼らが差別的な時代の制約を受けていたことは間違いない。ただし、その彼らが徐々に立場を変えて、そうした主張がカナダ社会で受け入れ始めていた点を重視するべきであろう。

なお、文化多元主義者の関心から外れていたのは「非白人」だけではなく、フランス系もそうだったのだとマイスターは指摘している。曰く、「大戦間期から第二次世界大戦後まで、文化多元主義は主としてヨーロッパ系マイノリティを対象とした英語によるプロジェクトであり、フランス系カナダ人は扱いにくい存在だった」というのである⁽³²⁾。これは現代の多文化主義においてこの国がケベック州フラ

ンス系の扱いに苦慮している状況と類似している。カナダで多民族共生を強調する際に、フランス系の処遇は古くて新しい問題なのだ。

また、現代の多文化主義がしばしばそう批判されてきたように、文化多元主義者はフォークロアや音楽や祭りなどにばかり注目しているという言い方も出来るだろう。ただし、「好ましからざる国々」から来た白人として劣位に置かれていた「ニュー・カナディアン」にとっては、社会から認知を得る重要なプロセスであったに相違ない。

メルティングポット論と文化多元主義の立場の違いを意識しながら、『カナダのモザイク』の序文でギボンは次のように綴っている。

将来のカナダの民族は、先住民の上に30以上のヨーロッパ諸民族グループを重ね合わせたもので、それぞれが独自の歴史、習慣、伝統を持っている。政治家の中には、隣国アメリカが国民全員を出来るだけ早く100%アメリカ人にしようと急いでいるように、人々をできるだけ早く1つの標準タイプに統合しようとする人もいる。他方で、それぞれの民族が持っている最も価値ある資質や伝統を将来のカナダ人のために保存しようとする人もいる⁽³³⁾。

カナダにおいては、この後者の立場が尊重されて、それが後の多文化主義の採用へと繋がった。ギボンらの大戦間期の文化多元主義は、いまだ不完全ながら、民族間に対等な関係を築こうとするカナダの歴史において重要な一階梯となったのである。

むすびに代えて

本稿の主たる関心は、大戦間期のカナダで、民族文化に関するホスト社会の認識に影響を与えたとされる文化多元主義に向いていた。アメリカ合衆国のホレス・カレンによるこの語は、カナダに輸入され、おそらくアメリカ以上にカナダで受け入れられて、モザイクなどの表現とともに、1971年以降には多文化主義を国是とするこの国の重要なシンボルとなった。

もちろん、時代の制約は大きく、まだまだ人種差別や社会進化論が根強い時代に、一部の知識人が文化相対主義的な価値観を提示し始めた段階に過ぎなかったという言い方も可能である。多文化主義のルーツと呼ぶには政府ではなく民間レベルの関与に留まり、その規模や影響も限定的ではあった。また、マイスターが論じたように、カナダを代表する文化多元主義者たちにも、「非白人」に対する差別意識や優生思想が見られた点は看過できない。

しかしそれでもなお、文化相対主義の立場で大きな一歩を踏み出したのであるし、彼らが個人として差別意識を乗り越えていった状況こそが、そのまま新たな時代への移行過程を示している。ホスト社会への同化を当然視する状況から文化多元主義的な価値観へと移行していく時には、様々な軋轢があったのは当然で、それを乗り越えたからこ

そ今日の多文化主義国家カナダが存在しているのだ。

なお、現時点で実証できているとは言い難いが、カーコネル、イングランド、そしてギボンの3人にカナダ平原諸州の経験があったことはおそらく重要な意味を持つ。「ニュー・カナディアン」が無視できない規模の社会を目にしていたからこそ、民族間の関係についてより柔軟な発想が出来たのであろう。今後20世紀前半のカナダ社会の変化を検証する際には、西部社会の状況に着目するべきである。

本稿は、昨今のカナダ多文化主義に関する議論に歴史研究の立場から貢献する方法はないかと考えていた際に、マイスターの研究成果に触発されて、大戦間期の変化を描こうとした取り組みである。一次資料を用いた実証的な研究に向かう前の研究ノートに過ぎないが、この内容についてご意見やご教示をいただければ幸いである。

注

- (1) 現代世界における多文化主義への逆風の理由を説明するのは本稿の主題ではないが、後発移民への平等性を強調することでホスト社会の文化が「侵害」されてきたという反感が逆風の一因である。多文化主義が3つのC(customs, celebrations, cuisine) や4つのF (folklore, food, fashion, festival) といった表層的な側面にばかり着目して政治・経済面での不平等を無視しているとの批判も見られる。(Mariusz Kwiatkowski, Anna Mielczarek-Żejmo, and Martin Strouhal eds., *Multiculturalism: From Crisis to Renewal?* Prague, Czech Republic: Karolinum Press, 2020, p.17 など参照。) また、石川涼子が説明するように、多文化主義が政府の中立性や個人の自由を十分に保障しない点でリベラルではないとする中立的リベラルの立場からの批判も重要である。(石川「リベラルではない文化への介入—カナダにおけるムスリム女性をめぐる事例の政治理論からの考察—」『ジェンダー研究』第15号、2012年、p.99参照。)
- (2) “Statement by the Prime Minister on Canadian Multiculturalism Day,” Government of Canada, June 27, 2022, <<https://pm.gc.ca/en/news/statements/2022/06/27/statement-prime-minister-canadian-multiculturalism-day>>. 以下を含め、本稿で参照したウェブサイトには全て2023年7月28日に再アクセスし、その段階で変更や削除がないことを確認済みである。
- (3) “The Canadian Census: A Rich Portrait of the Country’s Religious and Ethnocultural Diversity,” *Statistics Canada*, Oct. 26, 2022, <<https://www150.statcan.gc.ca/n1/daily-quotidien/221026/dq221026b-eng.htm>>.
- (4) “Culture Wars around the World: How Countries Perceive Divisions,” IPSOS, June 2021, <https://www.ipsos.com/sites/default/files/ct/news/documents/2021-06/Culture%20wars%20around%20the%20world%20_0.pdf>. なお、後者の問いに対して、アメリカ合衆国では83%が民族間の緊張関係があると回答している。
- (5) Daniel R. Meister, *The Racial Mosaic: A Pre-history of Canadian Multiculturalism*, Montreal & Kingston: McGill-Queen’s University Press, 2021.
- (6) Ibid., p.3.
- (7) N.F. Dreiszigler, “The Rise of a Bureaucracy for Multiculturalism: The Origins of the Nationalities Branch, 1931-1941,” in Norman Hillmer, Bohdan Kordan, and Lubomyr Luciuk eds., *On Guard for Thee: War, Ethnicity, and the Canadian State, 1939-1945*, Ottawa: Canadian Government Publishing Center, 1988, pp. 1-2.
- (8) John Murray Gibbon, *The Canadian Mosaic: The Making of a Northern Nation*, Toronto: McClelland & Stewart Ltd., 1938.
- (9) Benjamin Bryce, “The Mosaic vs. the Melting Pot? A Roundtable and Podcast,” *Active History*, Sept. 30, 2012, <<https://activehistory.ca/2012/11/the-mosaic-vs-the-melting-pot-a-roundtable-and-podcast/>>.
- (10) Israel Zangwill, *The Melting-Pot*, New York: The American Jewish Book Company, 1921 (Project Gutenberg eBook, 2007) <<https://www.gutenberg.org/files/23893/23893-h/23893-h.htm>>.
- (11) Garth Stevenson, *Building Nations From Diversity: Canadian and American Experience Compared*, Montreal & Kingston: McGill-Queens University Press, 2014, p.152.
- (12) 村井忠政「メルティングポットの誕生—メルティングポット論の系譜(1)」『人間文化研究』(名古屋市立大学)第2号、2004年1月、p.17。村井は、1980年代以降メルティングポット論が復活してきている点も指摘している。
- (13) Heike Paul, “Chapter 5: E Pluribus Unum? The Myth of the Melting Pot,” in *The Myths That Made America: An Introduction to American Studies*, Bielefeld, Germany: Transcript Verlag, 2014 <<https://www.jstor.org/stable/j.ctv1wxsdq.9>>, p.275. 文化多元主義という語はカレンによる造語である。
- (14) Horace Kallen, “Democracy Versus The Melting Pot: A Study of American Nationality,” *The Nation*, Feb. 15, 1915, p.218.
- (15) 村井「メルティングポットの誕生」p.27.
- (16) Edward Alsworth Ross, *The Old World in the New*, New York: The Century Co., 1914 (Project Gutenberg, Kindle Version), No.56/4529.
- (17) Paul, “E Pluribus Unum?” p.278.
- (18) 「ハイフン付き」の説明としては、たとえば Paul, “Chapter 5: E Pluribus Unum?” p.294 を参照。
- (19) Stevenson, *Building Nations From Diversity*, p.155.
- (20) 「好ましき国々」と「好ましからざる国々」の区別については、細川道久『白人支配のカナダ史—移民・先住民・優生学』彩流社、2012年、pp.209-223 を参照。
- (21) “Table 16. Racial origin classified by quinquennial age groups and sex, for provinces, 1931,” Census of Canada, 1931, vol. 3, Ottawa: Printer to the King’s Most Excellent Majesty, 1935, pp.146-181.
- (22) Victoria Hayward, *Romantic Canada*, Toronto: The Macmillan Company of Canada, Ltd., 1922 (Project Gutenberg, Kindle Version), No. 2980/4615. なお、モザイクという語が本書に登場するのはわずか2回で、あと1回

はBC州スティヴストンの魚たちに使われており、多民族共生社会の意味でこの語を用いているのは引用した箇所のみである。

- (23) Frances Swyripa, *Storied Landscapes: Ethno-Religious Identity and the Canadian Prairie*, Winnipeg: University of Manitoba Press, 2010, pp.6-7.
- (24) Meister, *The Racial Mosaic*, pp.57-58 など。
- (25) Ibid., p.100 など。ただしマイスターは、カーコネルの場合と異なり、イングランドのサスカチュワンでの体験を特に彼の文化多元主義への変化と結びつけて議論してはいない。
- (26) Ibid., p.167 など。
- (27) Ibid., p.147.
- (28) "The rise of the Ku Klux Klan in Canada — and why its lasting impact still matters," *CBC Radio*, Nov. 28, 2020, <<https://www.cbc.ca/radio/sunday/the-sunday-magazine-for-november-22-2020-1.5807350/the-rise-of-the-ku-klux-klan-in-canada-and-why-its-lasting-impact-still-matters-1.5807353>>.
- (29) Meister, *The Racial Mosaic*, p.171. ただし、1930年代後半以降は国家の関与も見られ始めたと続けている。
- (30) Ibid., p.61, p.107 など。
- (31) ギボン先住民を行事などに取り込もうとしており、その点で、他の2人とは少し立ち位置が異なる。(Ibid., p.157.) また、彼は著書でヨーロッパ系しか扱わなかったのを紙幅その他のせいだと断っており、「非白人」を無視する意図がどのくらいあったのかは不明である。(Gibbon, *The Canadian Mosaic*, p.xi.)
- (32) Meister, *The Racial Mosaic*, p.239.
- (33) Gibbon, *The Canadian Mosaic*, p.vii.